

社寺観光地琴平町にみる空間構造と 観光者の回遊行動

金 徳 謙

I. はじめに

日本における観光は1960年代以後急速に拡大し定着した。いわゆる観光の日常生活化の実現である。こうした生活の中での観光に対する位置づけの変化は観光に対する考え方の変化からも伺える。

1963年6月20日制定された観光基本法は、施行以来日本における観光に対する基本思想として、政府や地方公共団体における観光の取り組みの方向性に影響を与えてきた。しかし、2006年12月観光立国推進基本法が新たに制定され2007年1月から施行されることになり、それまでの日本における観光の方向が修正されることになった。言い換えれば、日本における観光に対する基本思想や位置づけの変化の表れである。

このように名実ともに生活の一部にまで成長した観光の起源を探ると巡礼にたどり着く。古くは平安時代の「熊野詣」があげられる。また、一般庶民にまで旅に出かけることが希なこと⁽¹⁾でなくなった江戸時代の「伊勢参り」などがあげられる。

江戸時代の一般庶民の伊勢参りが社会的現象⁽²⁾になるにつれ、江戸から伊勢までの参詣ルート上の各地およびその他の知名度の高い社寺などを中心に、日本全国に数多くの門前町が形成された。琴平町もその中の一箇所といえる。本稿

(1) 熊野詣が宗教的巡礼であったことに対し、伊勢参りは巡礼よりは現代における観光と同様な意味で普及した。本稿では巡礼の普及より観光の普及に焦点をあてている。そのため、熊野詣の普及ぶりと伊勢参りの普及ぶりを区別した。

では当時の伊勢参りを、自らの意思で楽しむ目的で日常生活圏から一時的に離れる行為と説明する日本におけるもっとも一般的な観光の定義⁽³⁾に基づき、人々の観光行動として捉える。それによって各地の門前町における各種施設は、伊勢参りをする観光者のための観光施設として捉えることができる⁽⁴⁾。本稿では巡礼者と門前町を、それぞれ観光者と（社寺）観光地として捉える。

江戸時代、一般庶民の観光行動は日本各地に門前町を数多く誕生させ、賑やかさせた。しかし、門前町は時代の変化とともに変化する観光者の行動に適切な対応を迫られるようになった。

1960年代観光の本格化が始まった「インフラ構築期」以来、「規制緩和期」にかけて、観光の規模は大きく拡大されたが⁽⁵⁾、その後「パラダイム変化期」を迎え、多くの観光地が衰退の途を辿っている。

近年、観光学をはじめに、その他の学問分野から地域を取り上げる研究が活発である。とくに、過疎化や少子・高齢化が拡大する中、地域振興のため、政

-
- (2) 一般庶民の移動の自由がなかった江戸時代に唯一な移動の自由は宗教目的の巡礼であった。一般庶民の多くは、宗教を建前に巡礼地の周辺や途中にある観光施設等での楽しみを目的とした旅をした。また、神崎（2004）によると、江戸時代に年間数十万人が伊勢参りに出かけたことになる。江戸中期の推定人口が1,800万人であることから考えると、当時、20人に1人が伊勢参りに出かけたことになる。旅に出られない子供や高齢者などを考えると実際にはより高い割合で伊勢までの旅に出かけたといえよう。つまり、江戸時代の一般庶民の多くが伊勢までの旅行を楽しんでいて、伊勢参りは当時の社会的現象になったといえる。
- (3) 観光の定義は、観光者の視点からの定義である狭義の定義が上述した定義で、観光事業や観光政策を考える際に観光の範囲を明確にするための定義である広義の定義に区分できる。本稿では、観光者の回遊行動に焦点をあてたもので前者の狭義の定義を用いる。
- (4) つまり、門前町は宗教的意味をもつ宗教活動のための便利施設の集合体ではなく、観光者に楽しみを提供する観光施設の集合体として捉えることができる。
- (5) 金徳謙（2006）は、観光の本格化が始まる1960年代から現在までを、観光が普及する過程、つまり、観光の拡大の過程を5期に区分し、説明した。第Ⅰ期：インフラ構築期、第Ⅱ期：法制度強化期、第Ⅲ期：規制緩和期、第Ⅳ期：パラダイム変化期、第Ⅴ期：再認識期がそれぞれである。第Ⅰ期から第Ⅲ期までは、観光は量的に成長し続け全国各地に観光施設が急速に増加した。しかし、第Ⅳ期に入り、それまでの量的な拡大への反省や観光そのものに対する認識の変化が現れ、観光者と観光地域住民との交流や自然環境との親和性を重視する形態の観光が芽生えそれまでの観光とは一線を画す形態となった。それにより、多くの観光地では観光形態の変化への適切な対応が求められるようになった。このように日本における観光の全容の変化は説明できる。

府が積極的に推進している‘一地域一観光’政策に足並みを揃えるような地域の活性化をテーマにした研究が多くみられる。しかし、これらの研究の多くは、持続的なイベント開催、高い有引力を有する観光施設の新設など、地域に新たな設備投資などの必要性を提言したものや、一次産業を生かした体験を提言したものなどに大別できる。しかし、実際に訪れる観光者そのものを研究の対象とした研究は少ない。これは、金（2007）が指摘したように、「地域における活性化対策が観光者を充分理解した上で講じられているとは限らない」と一致するといえよう。また、観光拡大の第Ⅳ期の「パラダイム変化期」に入ってから、多くの観光研究が農山村の地域活性化を取り上げるようになった。農山村における地域振興や、環境、持続可能性などを取り上げた研究で、一般的にグリーンツーリズムやエコツーリズムの研究分野に認識される研究がそれにあたる。また、近年、観光分野の新刊書物もこれらの分野が多く、農山村における地域活性化に強い関心を示している傾向がうかがえる。

一方、観光者そのものを取り上げた研究に限定しても、観光者の観光行動の分析を試みた研究は少ない⁽⁶⁾。しかし、地域における通行人の歩行行動に着目し、歩行者（交通）のながれの人為的操作を取り上げた工学分野からの研究、いわゆる人間行動の研究⁽⁷⁾におけるマクロ的視点の研究が古くからおこなわれており、観光学分野を先行している。

木下他（1999）によると、都心における歩行者の回遊行動は、歩行距離に着目した交通量の分析と歩行者の移動したルートに着目した回遊行動の分析に区分できる。前者がマクロ的視点というなら、後者はミクロ的視点といえる。前者のマクロ的視点からの研究は、金（2007）が指摘したように広範囲の地域における交通のながれの人為的な操作を分析するために適した研究と考えられ

(6) 観光者の心理を研究する分野が多く、旅館をはじめとする宿泊業や外食業などにおけるサービスの研究が多くみられる。

(7) これらの人間行動の研究は、行動の主体を一般人から観光者へと限定するなど観光分野への応用が充分できるものと考えられ、広域観光地を対象としたこの類の研究が多くみられる。例えば、京都における円滑な観光者のながれを保つための研究や駐車場設立や車のながれの操作などを取り上げた研究などがある。

る。しかし、本稿で取り上げるような狭い地域における観光者のながれや地域内における観光者の回遊行動を分析する研究には適しないと考えられる。観光者の回遊行動の分析には、前者のマクロ的視点より後者のミクロ的視点を用いた分析が適していると考えられる。ミクロ的視点からの分析を用いた研究はすでに工学分野をはじめ、観光学分野でも回遊行動の分析に用いられている⁽⁸⁾。また、木下他（1999）は、ミクロ的視点からの分析における調査の精度や効率を高めるため、GPSやPHSなどの情報機器を用いる調査手法の有効性を明らかにした。

地域の活性化やまちづくりを取り上げた研究に、地域の空間利用の実態や時系列的変化を明らかにした研究が観光学分野に少なく⁽⁹⁾、多くの場合、空間利用の実態や変化を研究者の直感的理解に依存するか、または、狭い範囲に限定した空間利用について述べることに留まっている。

そこで本稿では、木下他（1999）が指摘した後者のミクロ的視点から金刀比羅参詣に訪れる観光者の回遊行動を明らかにすることと、金刀比羅宮の門前町、琴平町における空間利用の実態を明らかにすることを目的とする⁽¹⁰⁾。さらに、門前町琴平町の活性化のための空間整備やプロモーションの方向性に関する提言を試みる。

Ⅱ．門前町琴平町

琴平町の誕生は古く、1873年金毘羅村の琴平村への改称からで、その後1890年町村制施行により琴平村が琴平町として誕生し、現在に至っている。また、琴平町は香川県で宇多津町に次いで小さく（面積8.46km²、東西3.3km、南北5.3km）、同県の西側に位置した人口1万527人（2007年4月1日現在）の自

(8) 木下他（1999）、金（2007）

(9) 金徳謙（2007）は香川県東かがわ市の引田町を事例に地域内での観光者の回遊行動や地域の空間利用の現状を明らかにした。それにより、観光によるまちづくりを図っている地域への科学的な空間利用の実態や観光者の観光行動について説明をした。白坂（1975）や白坂（1976）があるが、地理学からのアプローチを試みた研究である。

(10) 本調査では情報機器の使用による分析に先駆けたパイロット調査に位置づけ、後日同様な調査を、情報機器を用いた上、再度おこなうことを考えている。

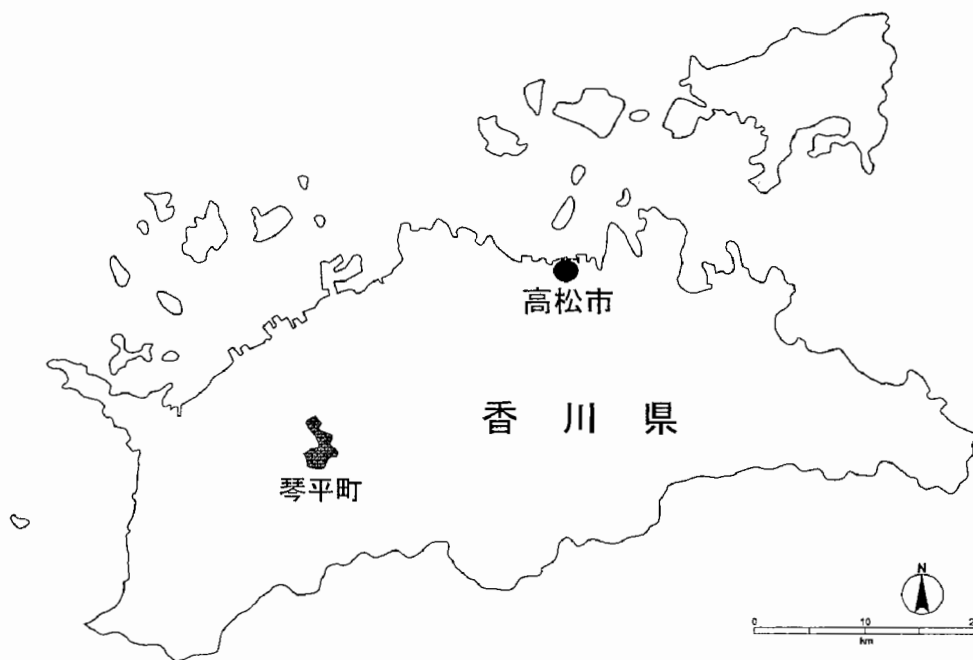


図1 琴平町の立地

治体で、古くから金刀比羅宮の門前町として栄えてきた。同町へのアクセスには、電車の場合、JR土讃線および琴平電鉄⁽¹¹⁾が利用できる。車の場合、1988年開通した瀬戸大橋の南端の坂出インターチェンジから約10kmの距離で、交通アクセス性⁽¹²⁾の高さが伺える。金刀比羅宮は香川県を代表する観光地で、現在香川県を訪れる観光者の2人に1人は金刀比羅宮を訪れている。このように金刀比羅宮は名実ともに香川県を代表する観光地であるが、近年、訪れる観光者が年々減少する傾向にある。

『琴平町史』にはかつての賑わいをつぎのように記している。

享保3年(1718年)至仕讃陽文学菊池武雅謹識「讃岐州那珂郡像頭山金毘羅神祠記」には琴平のまちの賑わいが詳細に記録されている。琴平町が門前町として最も盛況したのはこの時期であると推測される。

- (11) 1927年4月から琴電琴平駅まで開通され、高松築港駅から琴電琴平駅までの全長32.9kmで、地域住民の生活に留まらず、香川県を代表する観光地である栗林公園や金刀比羅宮を結ぶ観光交通機関としての役割を果たしている。
- (12) 観光地における来訪者数に影響を与える要因には様々なことが考えられるが、その中のひとつに交通の利便性がある。一般に、観光者が観光地までアクセスする交通の利便性を、観光における交通アクセス性と表現する。

琴平町は全国的に知名度の高い観光地を有していることから古くから観光産業に携わる人々が多く、現在も同町の主産業はサービス業、その中でも観光産業である。平成12年の国勢調査によると琴平町における就業人口の中、第三次産業への就業人口比率は70%であった。近年の少子・高齢化の拡大によりこの比率はさらに増加する傾向にある。このような産業構造から琴平町の観光産業は重要な産業として町民の生活に直接かかわっており、門前町の活性化は同町においてもっとも重要な課題になっている。

しかし、来訪観光者の減少や通過観光地への転落は、門前町の衰退を拡大させる要因となった。また、町内における観光の波及効果の減少の原因となった観光者の行動の変化も要因にあげることができる。一般的な社寺観光地でみられる回遊行動や買物行動がほとんどみられなく、多くの観光者は門前町を素通りし参詣を終え、つぎの目的地に移動する行動をみせている。金刀比羅宮参詣のシンボリック的存在である階段街においても、観光者の買物行動はあまり見られない。観光業の売上げ低下は、商店主の高齢化とともに門前町の衰退がさらに拡大する要因となっている。

かつては全国有数の観光地であった琴平町は、時代とともに変化する観光形態に適切な対応に苦悩している。

Ⅲ. 調 査

1. 調査の概要

2007年施行された観光立国推進基本法は、観光地づくりと観光振興の推進に対する政府の強い意思の表れといえる。そのひとつに、昨年12月エコツーリズム推進法が制定され、自然観光資源を有する地域における自然環境の保全と観光振興を促し、地域におけるこの類の観光の拡大に結び継がれた。こうした動きは、全国的に「観光立県」などの地域単位の観光推進を大幅に拡大させた。「観光立県」の宣言や、観光事業の導入・拡大など、観光を積極的に推し進める地域が続々と登場するようになった。このように観光による地域振興や地域活性化が拡大する中、多くの地域でウォーキングや体験をテーマとする各

種のイベントが登場するようになった。香川県でも今秋 52 種の「まち歩きコース」が県内の各地で催行される⁽¹⁴⁾。提供するコースの多さは観光者の多様なニーズへの対応といえるが、その一方で観光者のニーズよりも地域重視のコースの羅列で終わることが懸念される。

本稿では「観光者」および「地域（空間）」を調査、分析する。詳しくは、社寺観光地琴平町を取り上げ、門前町における空間構造やその利用実態、および門前町における観光者の回遊行動を分析する。

2. 調査方法および手続き

本稿では、琴平町における門前町の空間構造や観光者の回遊行動を分析する。そのため、2006 年と 2007 年⁽¹⁵⁾ にかけて、4 回にわたり現地における空間利用の実態調査と観光者の回遊行動の追跡調査をおこなった。同時に、門前町、とくに階段街の商店主を対象に商店街の現状や問題点について聞き取り調査もおこなった。

まず、空間構造や利用実態の調査であるが、4 回にわたり調査をおこなった。

琴平町の住宅地図を基に、琴平町の門前町を中心に調査員が隅々まで足を運び、観光施設を確認しながら記録する方法で実施した。現地調査で得たデータは今後の GIS などによる分析に利用できるようにデジタル化作業も同時におこなった。

つぎに、門前町における観光者の回遊行動の調査であるが、2 回にわたり調査をおこなった。

(13) ここでは、地域により表現の差はあるが、まち歩き、ぶらり散歩などゆっくりまちの中や自然豊かな地域を歩く、最近多く見られる観光の形態の総称とする。

(14) 四国新聞記事（2007 年 9 月 22 日付）による。

(15) 2006 年には 4 月 8 日(土)および 5 月 6 日(土)の 2 回にわたり、門前町における観光者の回遊行動の調査を実施した。また同日程で、並行して階段街を中心にヒアリング調査および商店の種別や業態についての調査を実施した。

(16) 2007 年には 5 月 13 日(日)と 6 月 10 日(日)の 2 回にわたり、階段街を含む門前町全体を対象とし、2006 年実施した同様な空間構造や利用実態についての調査を実施した。また、階段街については補足調査に位置づけた上、分析に必要な部分に重点をおき調査した。また、これらの調査とは別に琴平町役場へのヒアリング調査も実施した。

観光者の回遊行動の調査には、調査員が対象者から直接聞き取って記録をする「聞き取り調査法」と対象者に設問紙をわたし後日記録した設問紙を返送してもらう「アンケート調査法」が多く使われている。前者は後者に比べ回答者の行動についての記憶が正確で信頼度は高く、回遊ルートの把握には有効な調査法であるが、各場所に停まった時間の確認が難しい欠点を有する。一方後者は、回答者が記録する時点による回遊ルートの信頼度にばらつきが生じ易い。また、記録紙の回収まで時間がかかることや記録紙の回収率の低さが問題に指摘できる。これらの方法以外に、調査員が対象者を追跡する「追跡調査法」があるが、調査員によるばらつきが生じやすいことや調査に時間がかかることが問題に指摘できる。また、調査することを対象者に告げて調査を実施する場合、調査対象者の行動が不自然になり得ることが指摘できる。本調査では、対象者に追跡することを告げず対象者の回遊行動を追跡しながらルートを記録する方法を選んだ。追跡に気づかれた際調査を中止せざるを得ない危険もあるが、もっとも自然な状態での回遊行動の調査ができる利点があるため、今回の調査法に選んだ。

最後に、門前町の中の商店街における商店主を対象に、商店街の現状と抱えている問題点などについて聞き取り調査をおこなった。この調査は、空間利用の実態調査と同時におこなった。

前述したが、筆者は今回の調査を、GPS (Global Positioning System) や GIS (Geographic Information System) を用いる今後の地域研究のためのパイロット調査に位置づけたい。そのため、調査員がGPS 端末を携帯して調査の対象者を追跡し、軌跡をパソコン上での分析も同時におこなった。

3. 調査内容の分析

ここでは、前節に記した調査方法により、4回にわたっておこなった調査で得たデータを基に、琴平町の門前町を中心とした空間構造とその利用実態、および観光者の回遊行動を分析する。

(1) 琴平町の空間構造

古くから金刀比羅宮は全国的に知名度が高く、多くの人々が参詣に琴平町を訪れた。また、琴平町には他では見られない独特な門前町の景観がある。琴平駅から金刀比羅宮に至るまでの参道は、県道 208 号を中心とした旅館街と階段街を中心とした土産物販売店街に分かれている（図 2 琴平町の各種店舗の分布と金刀比羅のメイン参道を参照）。旅館街は大型旅館が点在するが、その数は一般的な観光地でみる旅館街に比べると少ない。さらに、階段街の土産物販売店街は独特な景観を形成していて、古くから景観に大きな変化もなく保全されている。全国各地の多くの門前町が元の姿を変えていく中、琴平町の門前町の階段街は空間的拡大もほとんどなく原型が保たれている。

その要因には様々なことが考えられる。

一つ目に、急斜面の階段街に小規模の土産物販売店による商店街が形成され、空間的拡大が物理的に困難であったことがあげられる。二つ目に、観光交通手段の変化があげられる。モータリゼーションの普及以降、車による観光が増加し、それまでの宿泊観光地の多くは通過観光地に転じた。琴平町の場合もその一例で、観光者の利用交通手段の変化や日帰り観光者の増加の傾向からも明らかである。

図 2 から琴平町には土産物販売店が階段街を中心に集中していることが分かる。この点は地理的特徴から起因したことともいえるが、急傾斜で長い階段街を歩く観光者のための休憩できる施設やトイレなどの公共施設が不足していることも今回の調査で分かった。さらに、その施設の多くはメイン参道から離れていることも分かった。多くの観光者が歩く参道の近くにはトイレは一箇所だけで、その場所も分かりにくかった。図 3 ではメイン参道とはかけ離れた場所にトイレがあることが確認できるが、これらは駐車場や駅の構内にあるもので、徒歩観光者の利用はほとんどなく、途中のトイレ休憩などを考慮したものとは考えにくい⁽¹⁷⁾（図 3 参道と観光便利施設の分布を参照）。階段街では、飲

(17) 電車利用者や自動車利用者のための利便施設とも解釈できるが一般に、観光地にあるこの類の施設は、特定施設利用者および一般観光者の利用を前提にしているところが多い。

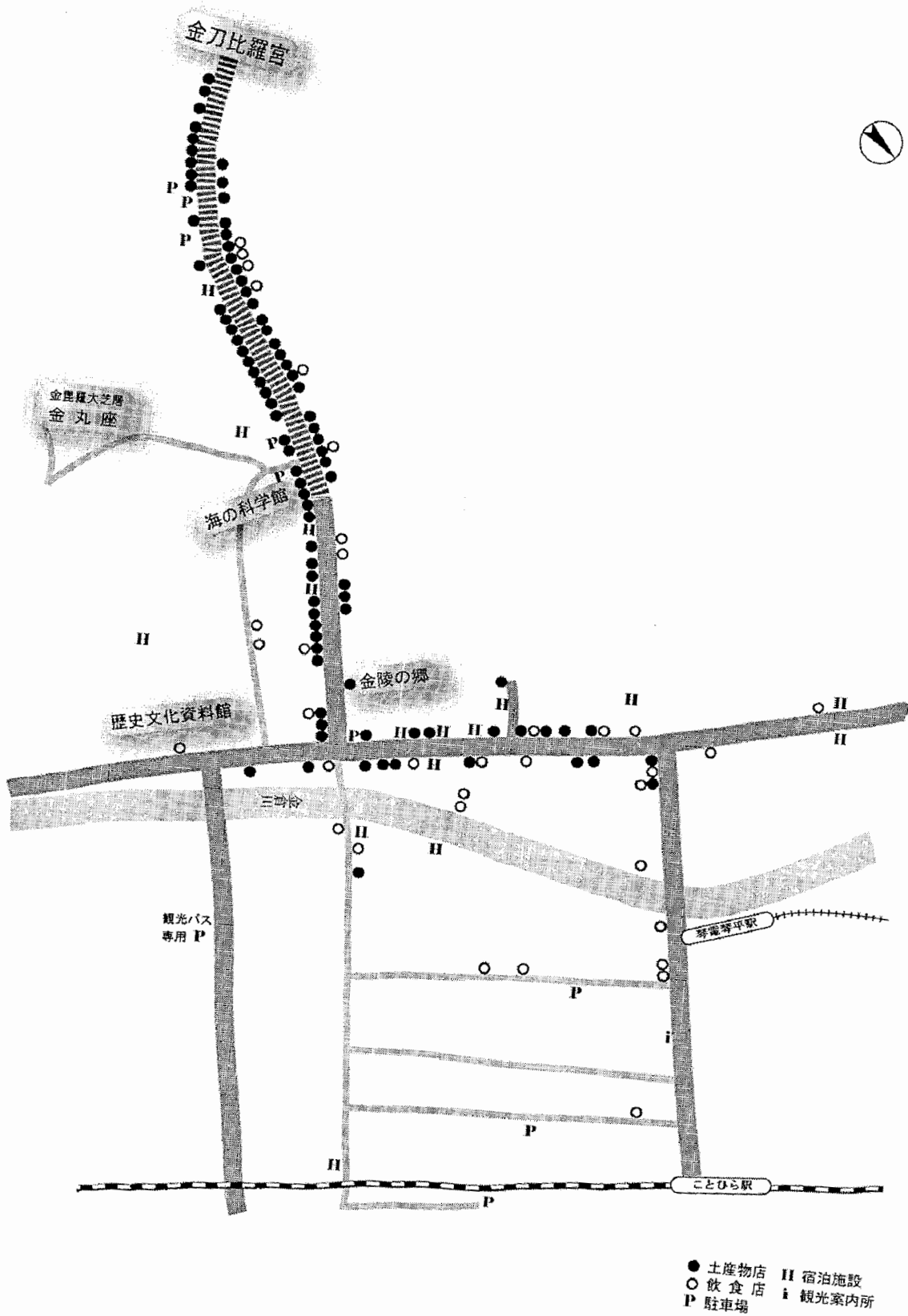


図2 琴平町の各種店舗の分布と金刀比羅のメイン参道

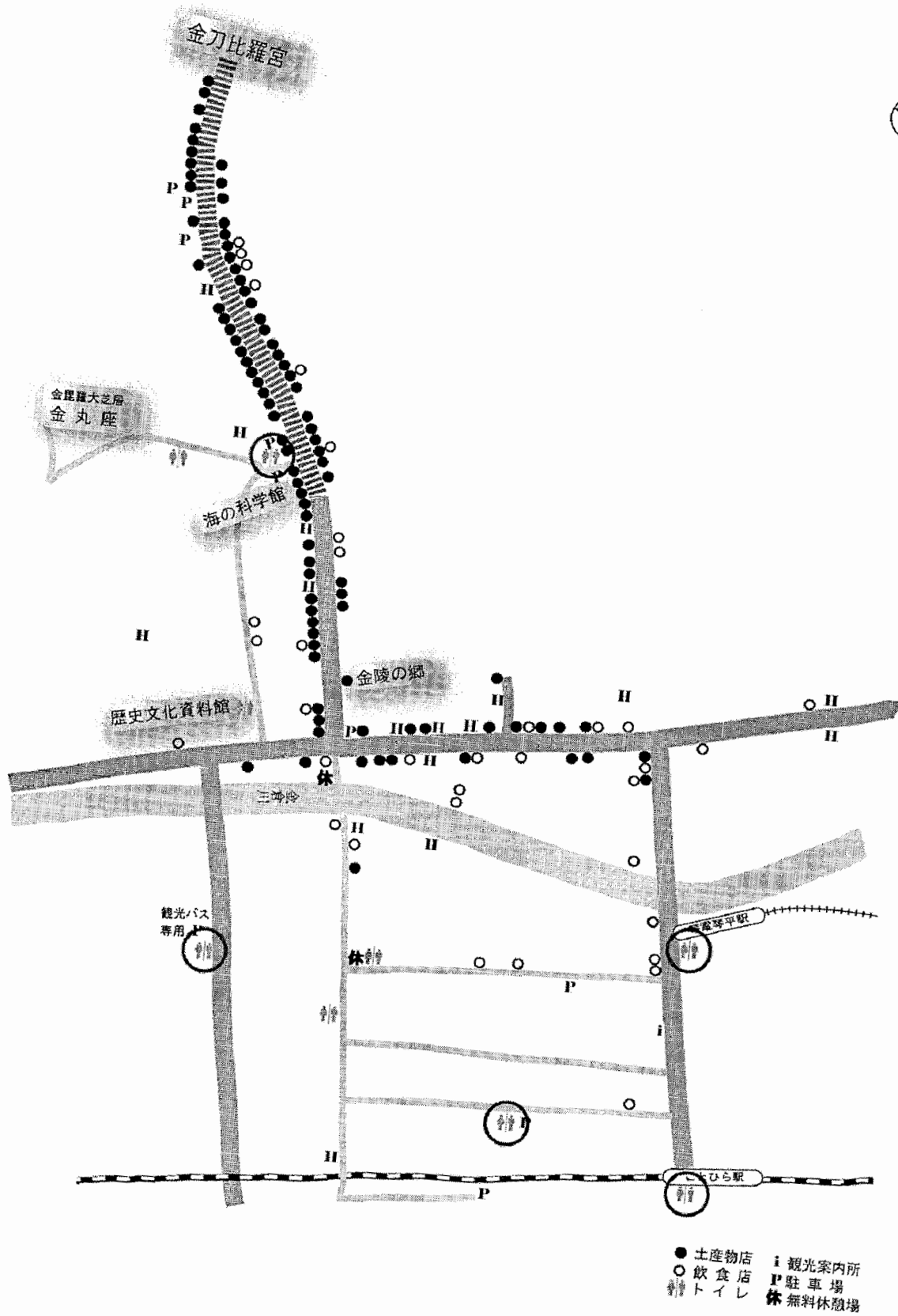


図3 参道と観光便利施設の分布

食店で休憩できるが、店舗数が少なく週末や休日などの時間帯によっては混雑が激しく、利便性が高いとはいえない。

つぎに、階段街における土産物販売店の集中は、琴平町の独特な門前町景観の形成に貢献した。しかし、多くの土産物販売店の品揃えに特色がなく、また、地場産業を生かした地域ならではの土産物の展示が少ない。どこにでもある地方色を感じられない土産物が多く、客足を止めるには程遠い品揃えであった。一方、旅館街にある土産店は、旅館が土産店と飲食店を一緒に経営しているところが多く、歩行途中に立ち寄るには抵抗がある雰囲気のお店が多かった。さらに、敷地内に駐車場を設け、通る自動車や観光者を相手に客引きをしている土産物販売店もあり、琴平町のイメージダウンにつながる光景が見られる。

琴平町は、階段街など急斜面が多く拡張が難しい空間的特長から、門前町の利用可能な空間が狭い。しかし、モータリゼーションの波は琴平町にも影響を及ぼし、道路には観光者と自動車が混じりあう光景が見られるようになった。⁽¹⁸⁾ 琴平町には歩行者天国や道路に車道と歩道の区別がなく、観光者の安全性が低い。琴平町の門前町は、観光者が安心して楽しく歩ける観光地にするために、空間利用に改善すべき点が多いことが調査を通じて分かった。⁽¹⁹⁾

また、観光利便施設の立地が観光者のメイン参道から離れており、これらの施設に気づいていない観光者も多かった。例えば、観光案内所である。自動車で来訪する観光者が観光案内所を訪ねるためには、図3で分かるように参詣道から離れることになる。また、電車で来訪する観光者の場合も、JR 琴平駅を利用する場合のみ金刀比羅宮に向かうルート上に観光案内所が位置する。運行本数が多い琴電琴平駅を利用する観光者には車を利用する場合と同様、その存在に気づきにくい。観光案内所はもっとも観光者の通りが多い場所にあるべき

(18) 本稿では、とくに、県道 208 号を中心に階段街に至るまでの観光者がもっとも多く歩いている道路に限定する。

(19) 森川他(1995)はモータリゼーションの進展によって自動車利用の近距離観光交通の増加は見逃せなくなっていると指摘した。また、これは日帰り観光圏への自動車休日交通の増加をもたらす結果に結びつかれていると指摘した。このように、とくに、知名度の高い観光地においては観光者と自動車について考え直し、両者の円滑なながれや安全について再考する必要があると考えられる。

で、現在の観光案内所の立地には疑問が残った。

最後に、琴平町には観光スポットが金刀比羅宮だけではなく、金刀比羅大芝居の公演がおこなわれる金丸座や、海の科学館、歴史文化資料館、地酒の生産販売をおこなっている金陵の郷、高灯籠などがある。しかし、多くの来訪者は金刀比羅宮だけを目当てに琴平町にやってきて、それらの場所には目も向けずに参詣後すぐ琴平町を離れる傾向が見られた。

ここまで、現地での調査に基づき、琴平町の空間構造と利用の実態を取り上げ、その中での観光施設や観光付帯施設の立地や分布の実態を中心に分析した。

(2) 観光者の回遊行動

一般的に日本における観光は、数箇所の観光地を訪ね歩いた後、宿泊する宿泊観光と出発地に戻る日帰り観光で大別できる。⁽²⁰⁾観光に出かける際、訪れる観光地には訪問する優先順位が付けられると考えられる。その優先順位は観光者個人の尺度によるもので、優先順位の高いところでは滞在時間が長くなるとされている。⁽²¹⁾また、観光者の行動はテニスラケット型とピストン型で説明できる。前者は観光地における各観光スポットに魅力を感じ、各スポットを転々と歩き回る回遊行動をいう。それに対して後者は、途中で点在する観光スポットに魅力を感じず、観光者が考える最終目的地に直行する単純往復の行動をいう。これは、溝上他(2000)が明らかにした観光地魅力度と滞在時間に相関関係があることで説明できる。

ここでは、琴平町を訪れる観光者の回遊行動について考えてみよう。

琴平町を訪れる観光者に、電車利用の場合にはJR琴平駅と琴電琴平駅の何

(20) 観光に関連する定義は明確な定義が存在しない。それにより関連する用語の定義も研究の都合により定義づけた上、使用するのが一般的である。本稿においても同様で、ここでは宿泊する場合と宿泊しない場合に区分し、それぞれ宿泊観光と日帰り観光に定義づける。

(21) 溝上他(2000)は観光地の魅力度を推計し、魅力度が高い観光地で滞在時間が長くなることを、京奈和地域を事例とした研究で明らかにした。これは観光者の回遊行動を表したもので、地域によってその行動が大きく変わるとは考えにくい。つまり、琴平町における観光者の回遊行動にも適用できるといえる。

れかの駅から金倉川の大宮橋をわたって旅館街を經由して階段街を上り、金刀比羅宮まで回遊するのがもっとも多い参詣ルートである。また、自動車を利用する場合には町立駐車場や、私設駐車場、土産物販売店の駐車場に駐車する。後の回遊行動は、電車を利用する場合と同様な参詣ルートとなる。バスによる団体旅行の場合には、乗用車よりもっと遠い駐車場から、歩道と車道の区別のない県道208号を歩き、後は階段街を登る参詣ルートとなる。このようにどの交通手段を利用しても階段街前の商店街を經由することになる。

今回の追跡調査では、つるやビル（旅館つるや）から旅館とらやまでの間の階段街の手前の商店街では、各商店をのぞいてみたり出店で買物をしたりしながら商店街を回遊する観光者が多くみられた。しかし、階段街を上り始めると目的地の金刀比羅宮までの間、商店街を楽しみながらゆっくり登る人は今回の調査では見られなかった。階段街が始まる上り口付近では土産物販売店に興味を示すが、登るにつれて土産販売店の店員の呼び込みにもあまり反応せず目的地に向かって前進するだけの人がほとんどであった。つまり、階段街における観光者の回遊行動はほとんど確認できなかった。辛うじて階段街の前の平坦な商店街において回遊行動が確認できるほどであった。金刀比羅宮から下りてくる際にも同様で、階段街ではピストン型の行動をみせる傾向があった。階段街を下りてきた後の復路も往路と同じルートで、駅や駐車場に向かう行動を見せた。駐車場を出発地に、金刀比羅宮を目的地に捉えると、レクリエーション地で見られるピストン型の行動をみせ、一般的な観光地で見せる回遊行動とは異なる行動が確認された。つまり、金刀比羅宮の観光誘引力の強さとは別に、多くの観光者は「琴平町」の魅力を感じていない結果の現れともいえる。

周辺の他の観光スポットについての認知度は低く、金刀比羅大芝居が開かれる金丸座についても一部の人を除きそれほど認識されていなかった。また、船の科学館や歴史文化資料館を訪れる観光者は少なく、今回の調査でもいずれかを訪れた対象者はいなかった。

ここまで、門前町における観光者の回遊行動を、駅や駐車場から階段街までと階段街で区分し、分析した。琴平町を訪れる観光者の回遊行動から、琴平町

が見せたい観光資源⁽²²⁾についての認識度は低く、今後観光者に金刀比羅宮以外の観光スポットの周知や商店街における楽しみづくりを要することが分析から明らかになった。

IV. 考 察

1. 観光形態の変化

かつては金刀比羅宮を参詣する多くの観光者が宿泊観光者であったが、近年、宿泊観光者は減少し、来訪者のほとんどが日帰り観光者である。琴平町には、香川県を訪れる観光者の中、約2人に1人が訪れていて⁽²³⁾、香川県内でもっとも知名度の高い観光地である。しかし、県外からの観光者が、瀬戸大橋が開通した1989年を最高に、毎年減少していることや、県外からの観光者の県内での宿泊率が昨年度17.04%にまで低下した⁽²⁴⁾ことは、琴平町に宿泊する観光者の減少に影響を与えたと指摘できる。

また、県外から来訪する観光者が利用した交通手段に着目すると、瀬戸大橋が開通した1989年には瀬戸大橋を経由した県外からの観光者が多かった。当年の自動車を利用した県外からの観光者は64.73%であったが、2006年には72.09%⁽²⁵⁾に県外からの観光者の比率が大きく増加していることが分かる。つまり、県外からの観光者が利用する交通手段は徐々に自動車へシフトしていることが明らかである。

モータリゼーションが観光地の盛衰を分けたことは改めて説明必要はない。多くの観光地で古くからみられたことが、琴平町においてもみられるようになったともいえる。交通手段の変化は観光者の観光行動に変化をもたらし、さらにその変化は琴平町をそれまでの宿泊観光地から通過観光地⁽²⁶⁾へと変化させたと筆者は考える。

(22) 香川県や琴平町のウェブサイトや香川県の観光案内に掲載されている観光地を琴平町が見せたい観光資源とみなした。

(23) 平成18年香川県観光客動態調査報告に基づく。

(24) 前掲23)と同じ。

(25) 前掲24)と同じ。

自動車による観光は「点の観光」から「線の観光」へと観光者の行動を変えた。⁽²⁷⁾ その結果、観光者の認識も琴平町を宿泊観光地から通過観光地として捉えるように変化したといえる。これは観光統計のデータからも明白で、交通の発達は観光地の盛衰に影響することが証明された結果でもある。

2. 観光者の観光行動

琴平町においての観光者の行動に限定すると、金刀比羅宮にお参りをする参詣行動と土産品の購入などの買物行動に大別できる。社寺観光地の場合、門前町と参詣する社寺は一体となった空間、つまりひとつの観光地として認識され、その空間の中に散在する社寺や門前町の商店などの観光スポットを訪ねて回遊する行動をみせるのが一般的である。

橋本（1997）によると、観光者の回遊行動はラケット型とピストン型に区分して説明できる。ラケット型は、広域目的地までは直行しその後から散在する観光スポットを訪ね回る回遊行動となるタイプである。それに対してピストン型は、目的地までの間を直行するタイプで途中での回遊行動が見られないタイプで、スキー場やテーマパークなどのレクリエーション地で多くみられるタイプである。このピストン型の観光行動は、途中での滞在時間が短く、目的地以外のところに波及効果が少ないとされる。

(26) 観光者の観光行動を一日単位に区分して考えると、宿泊観光の場合当日の宿泊地を最終目的地とした上、目的地に到着するまでの間に複数個所の観光地を訪ね歩く回遊行動をみせる。つまり、滞在する観光地を宿泊観光地、途中立ち寄る観光地を通過観光地という。各地の特徴はつぎのようである。途中で立ち寄る通過観光地では滞在時間が短く消費行動も消極的で消費額も低い傾向がある。それに対し、最終目的地である宿泊観光地では滞在時間が長く消費額が高くなる傾向がある。このようなことは国民の観光動向からも明白である。しかし、日帰り観光者の場合にはその限りではない。

(27) 観光行動は複数箇所の観光対象を訪れ観賞することである。「点の観光」はその観光対象での楽しみがあるとされる。しかし、点から点、つまり、観光対象から観光対象への移動も楽しみになることを「線の観光」という。観光は楽しみがあって成立するものだから、観光者にとって「点の観光」より「線の観光」の方が好まれるのは当然である。しかし、「線の観光」では、通過観光地では滞在時間や消費行動が萎縮される傾向がある。それに反して滞在観光地または最終目的地の場合はその逆で滞在時間や消費行動の拡大傾向がある。

琴平町における観光者の回遊行動も前者のテニスラケット型の回遊行動と想定したが、今回の調査から予想とは逆にピストン型の行動であることが明らかになった。観光者の行動がそのように変化した要因には様々なことが考えられるが、急傾斜の階段で観光者が疲れやすいことや、観光形態の変化によりつぎの観光（目的）地へ移動することなどが考えられる。その他、琴平町の門前町に魅力を感じないことが指摘できる。

ここでは、商店街の魅力低下について考えてみよう。

まず、階段街を含む土産物販売店の品揃えがあげられる。多くの土産物販売店が同様な品揃えで、地域らしさを感じる土産物がほとんどなく、さらに他の観光地との差別化ができない。数箇所の店舗を見るだけで魅力を感じず、急いでつぎの目的地に移動することになる。

つぎに、サービスの品質の低さがあげられる。客の呼び込みや、押し売り、客への悪口など、いまや他の観光地ではほとんどみられない行為がおこなわれ、琴平町の知名度を傷つけている。

観光者の行動を変えた要因には自然的要因や社会的ニーズの変化がある。要因を探るときにはそれらが大きく取り上げられているが、もっと大事な要因は人為的要因である。観光者は、全国有数の観光地である琴平町にそれに相応しいサービスの提供を求めている。それに応えられない時、観光者は行動を変えることになる。つまり、観光地におけるサービスの品質向上は、観光者の滞在時間を延ばすもっとも重要な要因であるといえる。琴平町における観光者の減少に歯止めをかけるための必要要因といえる。

3. 琴平町における門前町の空間形成

古くから金刀比羅宮参詣の門前町として栄えた琴平町は、階段街の参詣道や、階段街に立ち並んだ土産物販売店街、旅館街、その他の各種施設で形成された独特な景観を有し、今日においては社寺観光地として高い観光誘引力をもっている。また、琴平町は、多くの門前町が昔の姿を失っていく中、現在も昔の姿を保っている数少ない社寺観光地でもある。門前町の立地特長から空間

的広がりや空間利用の変化も他の社寺観光地と比べ少なく、全国的にも稀な旅館主導型ではなく土産物販売店主導型の門前町を形成している。このような琴平町独特な門前町の景観を形成した要因には、「制度」の存在が調査から明らかになった。

4回にわたる調査で琴平町の空間構造を明らかにしたが、このような独特な空間形成には、前節で述べた立地的な要因以外にも同町における「琴平町観光条例」が重要な要因であったといえる。同条例は1956年10月施行され、1989年12月改正されるまでの間、有効な条例であった。現在は改正された新しい条例に変わっている。ここでは、改正前の当時の条例が琴平町の空間形成に果たした役割を検証するため、当時の条例を分析することを試みたが、当時の条例の原文は紛失により確認できなくなった⁽²⁸⁾。しかし、当時の琴平町観光条例を溝尾(2007)が紹介しているので、つぎに引用する。

「琴平町観光条例」は1956年10月3日に施行された。旅館が館内に土産物を設ける動きのあったとき、土産物店の突き上げでつくられた条例である。14条にわたっており、その内容は、互いに他の分野の事業を侵してはならないという機能分担主義の原則で貫かれている。たとえば、第6条は「旅館、料理屋または飲食店は同一家屋内または同一施設内において、土産物販売業を営んではならない」とある。

琴平町ではこのような条例の存在から長い間、土産物販売店と旅館との棲み分けが、他の観光地とは異なる景観の誕生に大きな役割を果たしたと考えられる。

4. 琴平町の空間利用

琴平町の門前町は空間構造の特徴や観光条例に影響され、土産物販売店と旅館の立地が分かれて位置している。しかし、その一方で、土産物を販売する店

(28) 当時の「琴平町観光条例」を参考にするため琴平町観光商工課に問い合わせたところ、残念ながら当時の条文は紛失され、原本の確認ができないとの返事だった。同条例は1999年改正される際、溝尾(2007)が指摘した第6条が削除され現在に至っている。削除理由についての問い合わせについては、観光者からの要望により旅館内での土産物販売に関する規制を削除する運びとなったとの回答があった。

舗は多いが、観光者の利便性を高める公共の施設（観光便利施設）の少なさが今回の調査で明らかになった。

急な階段を上り下りする必要があるのに休憩施設やトイレなどの施設が無いに等しいことが指摘できる。トイレは町立駐車場やその他の駐車場と駅舎内にあるだけで、休憩所は観光者の動線を見逃し、参詣メインルートから離れた空いた土地につくってあるだけで、利用する観光者はほとんどいなかった（図3参照）。これらの観光便利施設について観光者への周知およびこれらの施設の立地の再検討を要すると考えられる。

つぎに、観光者と自動車の混住する門前町の交通環境の見直しである。来訪する観光者の多くは日帰りや通過する観光者がほとんどである。また、利用する交通手段も自動車が多い。観光者が増加するほど、人と車との混住が激しくなり、安心して歩くことができなくなる。琴平町には地域の住民の車と観光者の車とが混ざって門前町を走行している。こうした交通渋滞や交通安全の問題を改善するため、門前町の中心街の外への駐車場の整備やその場所の周知、歩行者天国の導入、駐車場料金制度の見直しなど観光者および自動車のスムーズなながれをつくるなど空間利用の検討が望まれる。

5. 観光拡大および地域振興のための提言

古くから観光産業を大事にしてきた琴平町には金刀比羅宮以外にも観光資源がある。しかし、金刀比羅宮の観光誘引力は、他の観光資源と比べ大きく、他の観光資源に観光者の目が向けられていない。

筆者は、観光拡大のために「観光者」と「地域住民」の共生が必要条件と考えている。両者共生のためには、観光者が地域のより広い範囲を回遊することが求められる。観光者の回遊行動は、単なる経済効果だけではなく、地域に活気をもたらしてくれる。

観光者の回遊範囲の拡大のためには、地域に散在する観光資源を活用した回遊できる観光ルートの検討が必要である。例えば、昭和の雰囲気漂うこんぴらレトロ街道、金倉川沿いの整備により川沿いの新たな散策ルートの新設など

のような地域らしさを生かした観光拡大と地域づくりを提言する。なお、図4に、金毘羅大芝居の公演場の金丸座を生かした回遊ルート、川沿いの散策路整備ルートを破線で、こんびらレトロ街道を黒線でまとめた。

時代の変化は観光形態を変え、琴平町を訪れる観光者は日帰りや一時的に立ち寄る通過観光者が今よりさらに増加すると考えられる。また、大都会が隣接した観光地とは違い大都会からの日帰り観光者は望めない⁽²⁹⁾琴平町では、近隣地域からの日帰り観光者や一時的に立ち寄る通過観光者をターゲットにした上、観光拡大のため積極的に取り組むことを提言する。

V. 終わりに

観光地には様々なタイプがあるが、多くの観光地では宿泊観光者の減少が指摘されている。日本の人口構成から考えると、昔のような観光者の増加は望めない。一方では、今日の観光は人々の生活の一部となっている。このようなことから、今後さらに日帰り観光や短期旅行が増加することが期待できる。

琴平町においても今後さらに日帰り観光者や一時立ち寄るだけの通過観光者が増加すると考えられる。観光は、観光者だけのためでも地域住民だけのためでもなく、両者共生のためのものである。「地物」に「地域らしさ」を加え、来訪する観光者に提供することこそが、共生のための方法と筆者は考えている。

香川県を代表する全国有数の観光地である琴平町が、これからも高く評価されるために、さらなるサービスの品質の向上も欠かせない。上記に加え、町内の観光事業者および地域住民のサービス向上のための取り組みも勧める。

最後にこのような調査研究が地域の観光拡大や地域づくりに少しでも役に立つことを期待する。

(29) 金(2007)は自動車利用の観光者の場合、約100kmが日帰り観光圏であることを指摘している。それを超える場合は、宿泊観光者が増えることを指摘した。また、Helga(1999)を引用し、隣接する地域からの来訪者がもっとも多くなることを指摘した。言い換えれば、観光地における隣接地域からの日帰り観光者の大事さの強調である。

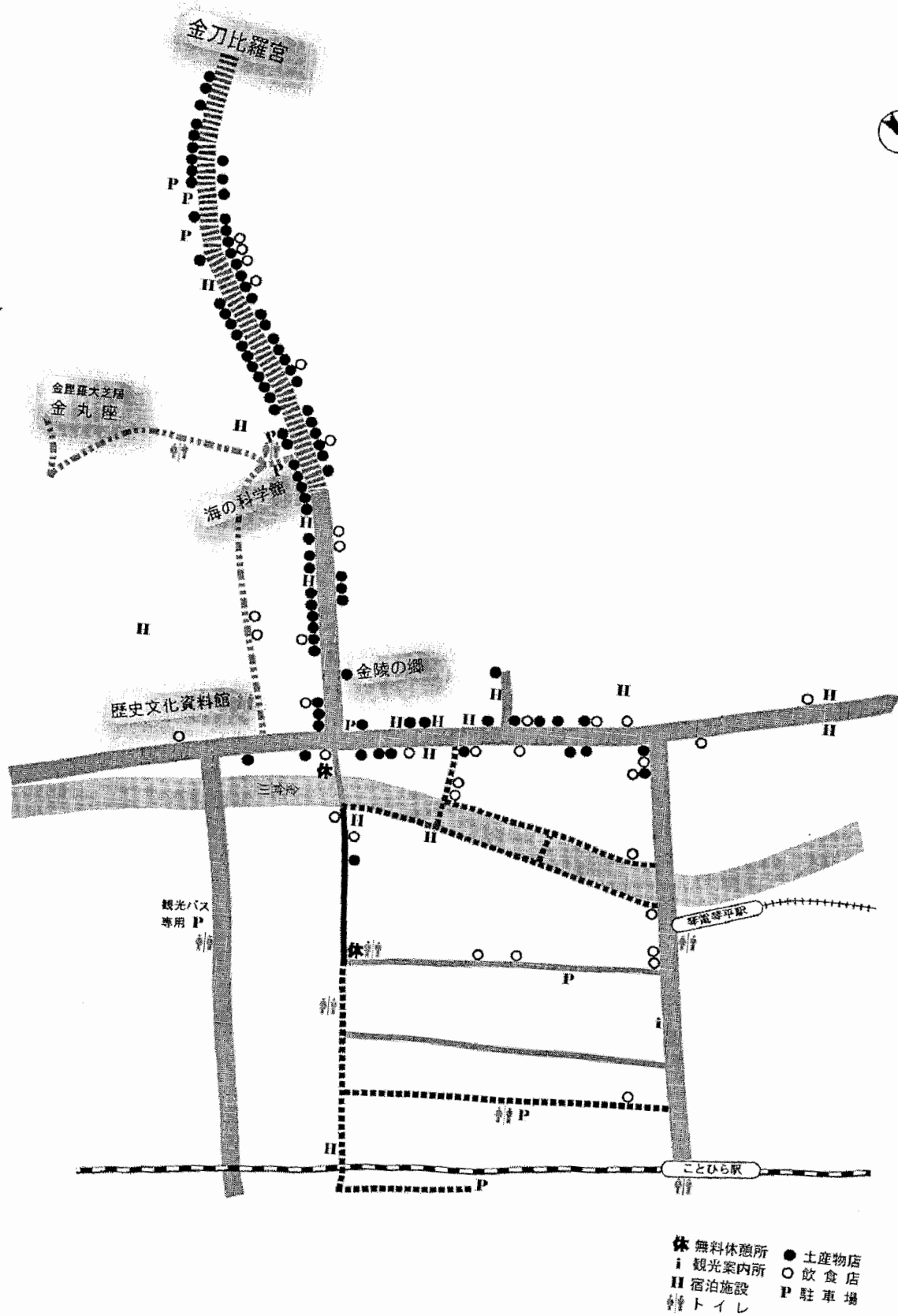


図4 新観光ルートのご案内

参 考 文 献

- 芦原義信 (1979) 『街並みの美学』 岩波書店
- 伊丹正博・徳山久夫・細川滋 (2003) 『県民百年史 37 香川県の百年』 山川出版社
- 神崎宣武 (2004) 『江戸の旅文化』 岩波新書
- 木下瑞夫・田雑隆昌・牧村和彦・浅野光行 (1999) 「都心地区における歩行者回遊行動調査とその有効性に関する研究」『土木学会論文集』 No. 625, IV-44, pp. 161-170.
- 金徳謙 (2006) 「研究誌にみる日本における観光およびその研究の動向」『香川大学経済論叢』 第79巻第2号, p. 73-97.
- 金徳謙 (2007) 「東かがわ市引田町にみる空間構造と観光者の回遊行動」『新しい観光の諸相』 香川大学経済学部ツーリズム研究会
- 琴平町 (1970) 『琴平町史』 琴平町史刊行会
- 白坂蕃 (1975) 「日本におけるスキー場の開発 —ヨーロッパ諸国と比較した観光地理学的考察—」『地理』 20巻2号, pp. 100-110.
- 白坂蕃 (1976) 「野沢温泉におけるスキー場の立地と発展 —日本におけるスキー場の地理学的研究 第1報—」『地理学評論』 第49巻6号, pp. 341-360.
- 白幡洋三郎 (1996) 『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』 中公新書
- 田村明 (1977) 『都市を計画する』 岩波書店
- 田村明 (1984) 『都市の個性とはなにか』 岩波書店
- 田村明 (1987) 『まちづくりの発想』 岩波新書
- 田村明 (2005) 『まちづくりと景観』 岩波新書
- 田村明 (2005) 『まちづくりの実践』 岩波新書
- 西井和夫・川崎雅史・土井勉・棚橋美佐緒 (2003) 「観光地エリアイメージと行動特性に基づく歩行者系回遊空間整備方法：京都洛東エリアを対象として」『観光研究』 Vol. 14, No. 2, pp. 37-45.
- 橋本俊哉 (1997) 『観光回遊論 観光行動の社会工学的研究』 風間書房
- 本間義人 (2007) 『地域再生の条件』 岩波新書
- 前田弘 (1999) 「観光の瀬戸内海」『新・瀬戸内海文化シリーズ2 瀬戸内海の文化と環境』 神戸新聞総合出版センター
- 溝上章志・朝倉康夫・古市英士・亀山正博 (2000) 「観光地魅力度と周遊行動を考慮した観光交通受容の予測システム」『土木学会論文集』 No. 639, IV-46, pp. 65-75.
- 溝尾良隆 (2007) 『観光まちづくり 現場からの報告』 原書房
- 森川高行・佐々木邦明・東力也 (1995) 「観光系道路網整備評価のための休日周遊行動モデル分析」『土木計画研究・論文集』 No. 12, pp. 539-547.
- 安村克己 (2006) 『観光まちづくりの力学』 学文社